子どもたちの大事な居場所の継続にご協力を！

日頃より、皆様にはビーンズふくしまの活動にご理解、ご協力をいただきまして本当にありがとうございます。

ビーンズふくしまでは、フリースクールをはじめとし、ほっと肩の力を抜いて、自分らしく居られ、繋がりあえる「居場所」をこれまで創ってまいりました。ただ子ども・若者たちの居場所も皆様からのご寄付により運営しており、毎年財政面で非常に厳しいのも現状です。

そこで、子ども・若者のための「居場所」を安定して運営していくため、1月1日～3月31日の期間、赤い羽根共同募金「地域課題解決型募金」を通じて、寄付キャンペーンを実施中です。

皆様から頂いたご寄付はフリースクールの子どもたちの図書費や文房具、また子ども食堂などでの什器備品、食材費などに充てられます。子どもたちは様々な社会活動を通して経験と自信を得ることができ、子どもたちの笑顔を数えきれないくらい生み出すことに繋がります。

●例えば……

5,000円のご寄付で、餅つきなど地域の皆様方との交流イベントが開催できます。

10,000円のご寄付で、子ども食堂が1日開催できます。

100,000円のご寄付で、子どもたちとの1泊2日での近隣他県でのサマーキャンプが開催できます。

なお、この寄付に関して、個人の場合は所得控除・税額控除の対象となり、企業等の法人に関しては全額損金算入の対象となるなど、税制上の優遇措置も得られます。

寄付をするには、郵便振替の専用用紙にご記入のうえお振込みいただくか、下記サイトからクレジットカード決済でも寄付ができます。子どもたちの笑顔のためにどうぞよろしくお願いします。

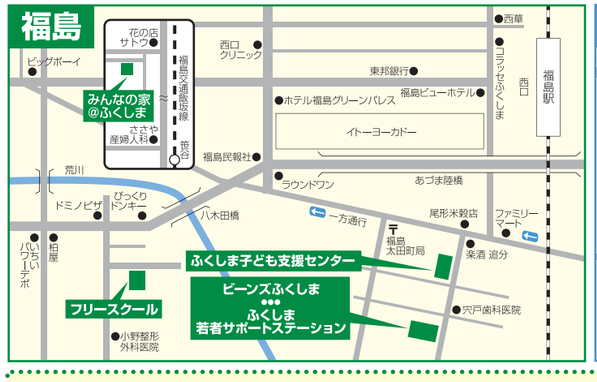
http://akaihane.or.jp/furusapo/support/thema/index.html#fukushima

アンケートのお願い

ビーンズ通信をいつもお読みいただき、ありがとうございます。また、前回へのアンケートにお答えいただいた皆さま、お忙しい中、本当にありがとうございました。皆さまからの温かいメッセージにあらためて感謝いたしますと共に、より皆さまに読みやすい紙面作りをしていく必要があることを感じました。そこで、皆さまにはお手をおかけすることは十分承知の上で、今回もアンケートを取らせていただきたく、ご協力のほどあらためてお願いいたします。

前回はビーンズ通信vol.85についてのアンケートでしたが、今回は、ビーンズ通信vol.86に関してのアンケートとなります。皆さまの率直なご意見をいただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、前回同様、同封しましたアンケート用紙にご記入の上、FAXにてご返信いただくか、項目ごとに番号を記入の上、メールにてのご返信をお願いいたします。



●ビーンズふくしまのホームページ　こちらへアクセス → http://www.beans-fukushima.or.jp/

ビーンズの「ひきこもり」支援の取り組み

「なんとかしたい…でもどうしていいのか、わからない。」相談にいらっしゃる多くの方が、まずおっしゃる言葉です。ひきこもっているご本人も、「このままじゃ良くないと思うし、なんとかしなくては…」と思っています。ビーンズふくしまは、ご家族やご本人が「どうなりたいと思っているのか」をお聞きし、そこに向かう方法を一緒に考えていきます。

「ひきこもり」は病名ではない

ひきこもりとは、病気ではなくあくまで状態を指す言葉です。

その定義は「様々な要因の結果として社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的に6ヶ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態(他者と関わらない形での外出をしていてもよい)を指す現象概念」となっています。

「ひきこもり」とされる状態の具体例

- ●学校を卒業・中退したまま仕事をしないでずっと家にいる。
- ●仕事を突然辞めてしまい、家にこもるようになる。
- ●家族との会話がなく、顔を合わせても避けようとする。
- ●昼夜逆転の生活をしているが、夜中にコンビニには出かける。

2016年9月、15歳から39歳を対象とした「ひきこもり」の調査結果が、「内閣府若者の生活に関する調査報告書」として発表され、その数は、54万人にのぼると推計されています。福島県に当てはめると約7,300人がひきこもり状態にあると推定されます。

ビーンズふくしまでは2014年（平成26年）より、福島県ひきこもり支援センターを受託し、県内全域・全年齢を対象に相談支援を実施しています。昨年11月までに、新規相談件数542件(うち8割が家族からの相談)、のべ相談件数2,772件(うち4割が本人相談)の相談対応をしてきました。本人相談のうち79%が男性、年齢は20代が34%、次いで30代が20%、初回面談にいらした時点までのひきこもり年数の平均は8.3年。また、内閣府調査では、ひきこもり年数は「7年以上」が34.7%となっています。

ビーンズ通信 vol.86

●発行日／2018年3月10日
●発行元
特定非営利活動法人
ビーンズふくしま
〒960-8066 福島県福島市矢剣町22-5 2F
TEL&FAX 024-563-6255
URL http://www.beans-fukushima.or.jp/
E-mail info@beans-fukushima.or.jp

NPO法人ビーンズふくしまは、不登校の子どもやひきこもりの青年などに安心できる居場所を提供し、1人1人に寄り添って、ゆるやかな社会参加を促し、その自立を支援する、若者支援の理念に基づいて事業を展開しています。

誰しもなりうる「ひきこもり」

ひきこもりとなったきっかけは様々で、「内閣府若者の生活に関する調査報告書（2016年9月）」によれば、「不登校」「人間関係がうまくいかなかった」「就職活動がうまくいかなかった「職場になじめなかった」等が挙げられていますが、原因やきっかけがはっきりしないことも少なくありません。

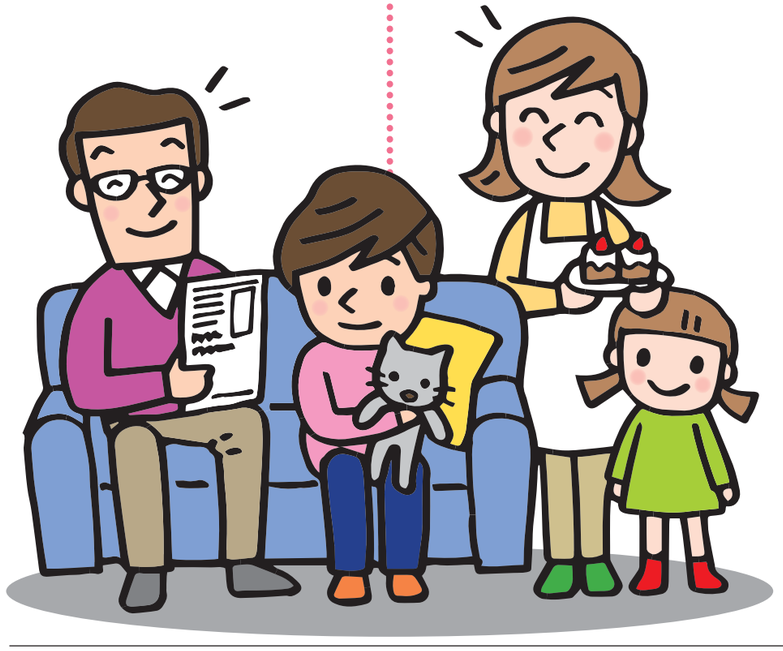
ひきこもりの要因は、ご本人やご家族にあるのではなく、様々な社会背景にあるのです。

この分野の専門家である齋藤環氏（筑波大学医学医療系社会精神保健学教授）は「どんな方でもひきこもりのリスクを抱えて生きています。それゆえ1次予防として『未然にひきこもりを防ぐ』ことは、現時点ではなかなか難しい。むしろひきこもりになってから適切に介入を行う、という考え方のほうが現実的です。」と、語っています。

「家族」の存在がカギになる

ひきこもっているご本人の多くは、人と関わることを「怖い」と言い、苦手さを感じています。自己評価が低くなってしまい、社会でやっていける気がしない状況では、次の選択ができないのです。そういう状況にあるご本人にとって、唯一接する人が「家族」です。その家族が、本人を変えようと迫るのではなく、本人の今の状況をすべて受け入れていくことが大事なのです。一見、立ち止まっているように見えるかもしれませんが、様々な社会背景に対して、自分が生きていくためにどうすればよいのかを必死に考え、試行錯誤した結果、選ばざるを得なかった選択肢がひきこもるということなのです。

本人が安心して家に居られるようになると、次の選択に向けて動けるようになってくるのです。



段階を追ってご本人とご家族のサポートを

家族の変化が、本人の1歩へ

大学卒業後就活がうまくいかず、ひきこもりになったAさん（30代）

母親がAさんの状態が変わらないので、なんとかしたいという思いでひきこもり支援センターに相談し、支援がスタート。

母親のみ来所

Aさんは「ひとりでなんとかする」と言って面談には現れず、しばらく母親のみの面談を続けた。センターのスタッフは、Aさんの日常の様子についてお聞きし、Aさんに対するご家族からの具体的な関わり方をアドバイス。

Aさんとご家族の関係に変化

母親は保健福祉事務所が開催する「ひきこもり家族教室」や「ひきこもり家族会」に参加し、Aさんとの関わり方を学び、就職活動については一切言わないことを決めた。ご家族は、Aさんに「ありがとう」と伝えたり、Aさんが話したいことがあったら「聴く」等、Aさんが今できていることを認める関わりを続けた。
Aさんは面談には来なかったものの、家の中で家事を手伝ってくれたり、夜にひとりで外出するなど行動に変化が出てきた。

Aさんが自らアルバイトへ

母親は、Aさんが変化を見せても就職に関して働きかけることはしなかった。すると、そのうちAさん自身がアルバイトを探しはじめ、自分ができそうなスーパーのバックヤードの仕事に自ら応募した。無事アルバイトが決まり、仕事内容や人間関係も良いらしく、現在も仕事を続けている。

様々な支援プログラムを利用して

高校での不登校をきっかけにひきこもり状態になったBさん（20代）

家から一歩も出ない息子にどう働きかけたらいいかわからないということで、ご両親がひきこもり支援センターに相談し、支援がスタート。

ご両親が来所

茶の間に出てきたり、夕飯は一緒に取るとのことだったので、その際の言葉かけや日常の関わりについてセンターのスタッフからアドバイス。

ご家族の関係に変化 Bさんも来所

ご両親が面談に来る際、Bさんへも無理のない程度に声かけをしてもらった。始めは「行かない」と拒否していたが、やがて、返事をしなかったり、「そのうち……」と言ったり、「何するの？」と聞き返してきたり、と徐々に反応が変化。今困っていることを相談し、一緒に具体的にできることを考えていくところであることをご両親から伝えてもらったところ、ご両親と一緒に面談に来てくれた。

安心して人と関われる居場所へ

センターのスタッフが面談をする中で、Bさんから、なんとかしたいと思っていたこと、でも人との関わりに不安があること、仕事を探す際、空白の期間を履歴書にどう書くのか、面接でどう話せばいいのか等不安があることを聞いた。そこで、就職に向けての相談なら「若者サポートステーション」があること、他人との関わりが安心してできる場として「ユースプレイス」という活動があることを紹介した。
Bさんは、それぞれのスタッフと会って説明を聞いた後、「ユースプレイス」の利用を希望し参加。何回か参加の後、「若者サポートステーション」の講座等の参加も希望し、現在は両方を利用している。
安心できる人との関わりを、各活動プログラムを通して広げている。

ひきこもりから、次に繋がる場を▶▶▶▶▶

ご家族が関わって、ご本人がせっかく動けるようになっても、次に繋がる場がなかったらご本人の歩みを止めてしまうことになってしまいます。ご本人が安心して次に踏み出せる場が、必要であるとビーンズふくしまは考えます。しかし、まだそうした場は少なく、社会の中に創っていく必要があるのです。